

雅歌雅歌は聖書の中でも極めてユニークな書です
8章にわたる愛の詩から成り立っていて
導入と結論があるほかは構成らしい構成はありません
というのもこれは詩集だからです 細かく分析するのではなく全体
を通して読み ただ味わうためのものです
この書の1行目のヘブル語を直訳すると
これが歌の中の歌だと告げています この表現は主の中の主王の中の
王のように その中の最上級のものだという
意味です つまり雅歌とは最も優れた歌だ
ということです なおかつソロモンの歌であると
記しています 彼の名をもって始まっているの
で彼が著者だと読み取れます しかし読み進めていくと雅歌の
おもな語り手は わが愛する者と呼ばれる女性である
ことがわかります また男性が語る場面もあります
が それはソロモンではないようです
ソロモンは詩の中に何度か登場 しますが語り手ではなく
そもそも700人の妻を持つ彼がこの書の著者だとは考えにくいのです
雅歌の中の恋人たちにとっては お互いが世界でたった一人の相手
ですということは ソロモンのとは
ソロモンの知恵の伝承のという 意味なのでしょう
ソロモンの知恵詩知的好奇心は よく知られており
彼はイスラエルの知恵文学の父 となりました
この影響が人間の愛と性的な欲望 を描いた
この愛の詩の中にも見られるの です
羊飼いを愛する若い女性の思い をうたった最初の詩には
この書のテーマが描かれています 二人はまだ結婚していませんが
婚約しており 一緒になる日を待ちきれずにいます
雅歌の詩は最初から時間の流れ を前後し
女性が語るかと思えば男性が語り 場面もくるくる変わり時系列に
沿ったストーリーがありません 音楽のように鍵となるイメージ
やテーマが繰り返されながら盛り 上がっていくのです
雅歌のテーマの一つはお互いを 探し
また発見する二人を通して描かれる 相手への切実な求めです
冒頭にある詩の後二人は離れ離れ になり
お互いを必死に探し回ります 彼女は彼のことを尋ね歩き
時には夢から覚めてそのまま探し に出っていきます

一度ならず二人は互いを見つけ 抱き合うのですが
さらに盛り上がりそうなところで 場面は突如として終わります
そしてまた二人は離ればなれで 互いを探すと
振出しに戻るのです もうひとつ繰り返し出てくるテーマ
は 二人が酔いしれている相手の肉体的な魅力です 凝った比喻を使いながら二人は
互いの容姿を何度もたたえます そしてこれを通してヘブル語の詩
に出てくる比喻やイメージは 必ずしも視覚的なものではない
ことがわかります ここに出てくる比喻をそのまま
絵にしたら それはおかしいものになるでしょう
このような詩を読むときは 男性や女性に関するそれらの比喻
が持つ意味を考えることが大事 です
詩に見られる繰り返しを通して 二人の欲望と喜びと惹かれ合う
気持ちががどんどん高まっていく のがわかります
この繰り返しは性的な愛の不思議 さと力強さを描き
ドラマチックに盛り上げるため の手法なのです
終わりに近づくとこれらのことが まとめられ
この詩全体が要約されます 愛は死のように強くねたみはよみ
のように激しい その炎は火の炎すさまじい炎
大水もその愛を消せず奔流もそれを 押し流せない
人が愛を得ようとして財産を与える なら彼は蔑まれる
雅歌の詩は美しくもあり 危険でもある愛の力強さと激しさに
焦点を当てています 愛は炎と同じで扱いを間違えば
命取りになります 正しく使えば活力の源になります
愛はお互いに深く知り知られ 求められたいという無限の欲望
なのです 愛は人生において最も神秘的で
奥の深い経験です そして聖書の知恵の書である本
書は それは神からの贈り物だと述べ
ています このあとの詩でソロモンは奇妙な
振る舞いに出ます 前に出てくる詩がそれは不可能
だと言っているのに 愛を買おうとするのです
女性はソロモンの申し出を断り また離れ離れになっていた彼と
彼女がお互いを探し合う場面で この書は終わります
彼は彼女の声を聞こうとし 彼女は彼と一緒に逃げてくれと
懇願するところで物語は終わり 結論がありません
しかし愛とはそういうものです 愛する者については常に発見と

追い求めるものがあり これで終わりということがありません
愛にエンディングがないように この書にもエンディングはない
のです さて長年議論されてきた問題があります
聖書の中になぜ愛の詩が収められているのか
ということです これまでおもに3つの解釈がされて
きました ユダヤ教の伝統ではこれは寓話
的な詩で それぞれの登場人物は象徴だと
考えられています 女性はイスラエル男性は神です
二人の愛は 神とイスラエルがシナイ山で結ん
だ契約とトラーである この考えはキリスト教の伝統にも
取り入れられて 人物が入れ替わりました
これはキリストの教会に対する 愛だと解釈したのです
それはクリスチャンの夫の妻に対する 愛はキリストの教会に対する愛の
象徴だというエペソ書5章のパウロ の言葉に由来しています
興味深いことにここ百年の間に 古代イスラエルの近隣諸国エジプト
やバビロンで さまざまな愛の詩が発掘されています
そしてこれらは言語的にもイメージ的にも
雅歌にとても似ているのです イスラエルの文化において愛の詩
は重要であったとわかります 今日のほとんどの学者たちは
雅歌は神からの贈り物である愛を 思い巡らす
イスラエルの詩集そのままだと みなすようになりました
とはいえこれは単なる古代の愛の詩 ではありません
旧約聖書の一部としてこれらの詩 を読むと
際立った特徴があることがわかり ます
それは園のイメージをふんだん に用いていることです
エデンの園と そこに住んでいた大らかな夫婦
のイメージを反映しているのです この夫婦は裸で無防備でしたが
固く結びあわせれ 互いを完全に信頼していました
雅歌の世界観にはこれと響き合う ものがあります
雅歌の詩の中には 自己中心と罪に汚されていない
恋人たちの愛を見出すことができる のです
たとえ男女の関係が罪によって 歪められていようとも
雅歌の詩は 愛はすばらしい贈り物なのだという
希望を与えてくれます さらにこれらの詩はいつか世界に
満ち溢れ 世界を作り変える神の愛へと私
たちの目を向けてくれるのです これが雅歌です

雅歌雅歌は聖書の中でも極めてユニークな書です
8章にわたる愛の詩から成り立って いて
導入と結論があるほかは構成らしい 構成はありません
というのもこれは詩集だからです 細かく分析するのではなく全体
を通して読み ただ味わうためのものです
この書の1行目のヘブル語を直訳 すると
これが歌の中の歌だと告げています この表現は主の中の主王の中の
王のように その中の最上級のものだという
意味です つまり雅歌とは最も優れた歌だ
ということです なおかつソロモンの歌であると
記しています 彼の名をもって始まっているの
で彼が著者だと読み取れます しかし読み進めていくと雅歌の
おもな語り手は わが愛する者と呼ばれる女性である
ことがわかります また男性が語る場面もあります
が それはソロモンではないようです
ソロモンは詩の中に何度か登場 しますが語り手ではなく
そもそも700人の妻を持つ彼がこの 書の著者だとは考えにくいのです
雅歌の中の恋人たちにとっては お互いが世界でたった一人の相手
ですということは ソロモンのとは
ソロモンの知恵の伝承のという 意味なのでしょう
ソロモンの知恵詩知的好奇心は よく知られており
彼はイスラエルの知恵文学の父 となりました
この影響が人間の愛と性的な欲望 を描いた
この愛の詩の中にも見られるの です
羊飼いを愛する若い女性の思い をうたった最初の詩には
この書のテーマが描かれています 二人はまだ結婚していませんが
婚約しており 一緒になる日を待ちきれずにいます
雅歌の詩は最初から時間の流れ を前後し
女性が語るかと思えば男性が語り 場面もくるくる変わり時系列に
沿ったストーリーがありません 音楽のように鍵となるイメージ
やテーマが繰り返されながら盛り 上がっていくのです
雅歌のテーマの一つはお互いを 探し
また発見する二人を通して描かれる 相手への切実な求めです
冒頭にある詩の後二人は離れ離れ になり
お互いを必死に探し回ります 彼女は彼のことを尋ね歩き
時には夢から覚めてそのまま探し に出っていきます

一度ならず二人は互いを見つけ 抱き合うのですが
さらに盛り上がりそうなところで 場面は突如として終わります
そしてまた二人は離ればなれで 互いを探しと
振出しに戻るのです もうひとつ繰り返し出てくるテーマ
は 二人が酔いしれている相手の肉体
的な魅力です 凝った比喻を使いながら二人は
互いの容姿を何度もたたえます そしてこれを通してヘブル語の詩
に出てくる比喻やイメージは 必ずしも視覚的なものではない
ことがわかります ここに出てくる比喻をそのまま
絵にしたら それはおかしいものになるでしょう
このような詩を読むときは 男性や女性に関するそれらの比喻
が持つ意味を考えることが大事 です
詩に見られる繰り返しを通して 二人の欲望と喜びと惹かれ合う
気持ちがちんちん高まっていく のがわかります
この繰り返しは性的な愛の不思議 さと力強さを描き
ドラマチックに盛り上げるため の手法なのです
終わりに近づくとこれらのことが まとめられ
この詩全体が要約されます 愛は死のように強くねたみはよみ
のように激しい その炎は火の炎すさまじい炎
大水もその愛を消せず奔流もそれを 押し流せない
人が愛を得ようとして財産を与える なら彼は蔑まれる
雅歌の詩は美しくもあり 危険でもある愛の力強さと激しさ
に焦点を当てています 愛は炎と同じで扱いを間違えば
命取りになります 正しく使えば活力の源になります
愛はお互いに深く知り知られ 求められたいという無限の欲望
なのです 愛は人生において最も神秘的で
奥の深い経験です そして聖書の知恵の書である本
書は それは神からの贈り物だと述べ
ています このあとの詩でソロモンは奇妙な
振る舞いに出ます 前に出てくる詩がそれは不可能
だと言っているのに 愛を買おうとするのです
女性はソロモンの申し出を断り また離れ離れになっていた彼と
彼女がお互いを探し合う場面で この書は終わります
彼は彼女の声を聞こうとし 彼女は彼と一緒に逃げてくれと
懇願するところで物語は終わり 結論がありません
しかし愛とはそういうものです 愛する者については常に発見と

追い求めるものがあり これで終わりということがありません
愛にエンディングがないように この書にもエンディングはない
のです さて長年議論されてきた問題があります
聖書の中になぜ愛の詩が収められているのか
ということです これまでおもに3つの解釈がされて
きました ユダヤ教の伝統ではこれは寓話
的な詩で それぞれの登場人物は象徴だと
考えられています 女性はイスラエル男性は神です
二人の愛は 神とイスラエルがシナイ山で結ん
だ契約とトラーである この考えはキリスト教の伝統にも
取り入れられて 人物が入れ替わりました
これはキリストの教会に対する 愛だと解釈したのです
それはクリスチャンの夫の妻に対する 愛はキリストの教会に対する愛の
象徴だというエペソ書5章のパウロ の言葉に由来しています
興味深いことにここ百年の間に 古代イスラエルの近隣諸国エジプト
やバビロンで さまざまな愛の詩が発掘されています
そしてこれらは言語的にもイメージ的にも
雅歌にとても似ているのです イスラエルの文化において愛の詩
は重要であったとわかります 今日のほとんどの学者たちは
雅歌は神からの贈り物である愛を 思い巡らす
イスラエルの詩集そのままだと みなすようになりました
とはいえこれは単なる古代の愛の詩 ではありません
旧約聖書の一部としてこれらの詩 を読むと
際立った特徴があることがわかり ます
それは園のイメージをふんだん に用いていることです
エデンの園と そこに住んでいた大らかな夫婦
のイメージを反映しているのです この夫婦は裸で無防備でしたが
固く結びあわせれ 互いを完全に信頼していました
雅歌の世界観にはこれと響き合う ものがあります
雅歌の詩の中には 自己中心と罪に汚されていない
恋人たちの愛を見出すことができる のです
たとえ男女の関係が罪によって 歪められていようとも
雅歌の詩は 愛はすばらしい贈り物なのだという
希望を与えてくれます さらにこれらの詩はいつか世界に
満ち溢れ 世界を作り変える神の愛へと私
たちの目を向けてくれるのです これが雅歌です

500字要約

『雅歌』は聖書の独特な一冊で、愛の詩で構成されています。導入と結論を除いて特定の構成はなく、詩集として全体を通して味わうものです。この書は「歌の中の歌」と呼ばれ、最も優れた歌であることを表しています。主題は愛で、ソロモンが著者だと思われていますが、実際の語り手は彼の恋人である女性です。詩は時間の流れを前後させず、主題やイメージが繰り返されながら進みます。二人の恋愛と欲望が美しく描かれ、深い意味を持った比喻が用いられています。この詩は愛の強さと奥深さを探求し、終わりを持たない愛の重要性を示唆します。解釈には様々なものがあり、愛を神や人間の関係の象徴と見る考え方もあります。また、エジプトやバビロンの古代の愛の詩との類似性も指摘され、イスラエル文化の愛の詩の重要性が示唆されます。雅歌は古代の愛の詩だけでなく、旧約聖書の一部として、固く結ばれた愛と神の愛について教える重要な一冊です。